雲ごほる木末のそらの夕月夜あらしにみがくかげもさむけし

空はしも曇るとは見えぬ朝あけの霜にうすぎる世のけしき哉

この夜半やふけやしぬらむ霜深きみねの音して床さえまさる

冬枯の草木のときをあはれとや花をあまねく降れるしらゆき

冬草

それとみえし霜の朽葉もなほ落ちて古枝ばかりの庭の萩はら

冬曉

あかしかぬる時雨の閨のいく寝覺さすがにかねの聲ぞ聞ゆる

かげうすき有明の月に鳴く鳥のこゑさへしづむ霜のをちかた

霜にくもる有明がたの月かげにとほちの鐘もこゑしづむなり

冬曙

響き殘るとほちの鐘はかすかにて霜のうすぎるあけぼのゝ空

冬朝

おきて見ねど霜ふかゝらし人の聲の寒してふ聞く寒き朝あけ

夜もすがら雪やとおもふ風の音に霜だにふらぬ今朝の寒けさ

冬夕

嵐吹きあられこぼるゝ今日のくれ雪のこゝろや近づきぬらし

しもがれの尾花が庭に風ふれてさむき夕日はかげさえぬなり

冬夜

星きよき木ずゑのあらし雲はれて軒のみしろきうす雪の夜半

冬月

空の海雲のなみもやこほるらむ夜わたる月のかげのさむけき

霰

冴えくらすあらしに雪やちかゝらしさきだつ霰軒に落つなり

雪

雲のゆふべ嵐のこよひ降りそめぬあけなば雪の幾重かも見む

野山見え草木もわかず花の咲く雪こそふゆのかざりなりけれ

朝日さす松のうれより落つる雪にきえがてにしも積る木の下

曉雪

降りうづむ雪の野山は夜ぶかきにあくるか鳥のとほざとの聲

曙雪

目にちかき軒の上よりしらみそめて梢かをれる雪のあけぼの

朝雪

うつりにほふ雪の木ずゑの朝日かげ今こそ花の春はおぼゆれ

風前雪

吹きみだしはらひもあへぬ竹の葉の嵐のうへにつもるしら雪

夜雪

軒のうへはうす雪しろし降りはるゝ空には星のかげ清くして

雨後雪

今朝の雨の名殘の雲やこほるらむ暮れゆく空の雪になりぬる

山雪

岩も木もすがたはさすが見えながらおのが色なき雪の深山べ

野雪

ながめやる限も見えずかすみゆく野原がすゑは雪としもなし

浦雪

波の上はあまぎる雪にかきくれて松のみしろき浦のをちかた

杜雪

雪にだにつれなくてやはやましろの常磐の杜も色かはるなり

山家雪

人はとはぬみ山の庵にあはれなほところもわかず降れる白雪

田家雪

末遠きかり田のおもの雪のうちにたてるや庵の見るも淋しき

閑居雪

軒の松にかよふ嵐のおとだにも絶えて幾日のゆきのふるさと

社頭雪

たのむゆゑの深き心はへだてぬをいつかみかさの山のしら雪

松雪

ときは木のそのいろとなき雪の中も松はまつなる姿ぞみゆる

雪中鳥

降りつもる雪のこずゑにゐる鳥の羽風も惜しき庭のあさあけ

雪中獸

おきいでぬ閨ながら聞く犬の聲の雪におぼゆる雪のあさあけ

雪中懷舊

むかしをばうづみや殘すしら雪の降りにし世のみうかぶ面影

雪中述懷

いたづらに降る白雪を集めもたぬ我が光なみ世さへくもれる

炭竈

立ちのぼる煙のすゑをあはれともたれかはとはむ小野の炭竈

除夜

年くると世はいそぎ立つ今宵しも長閑に物のあはれなるかな

戀

初戀

知らざりしながめや何ぞよしなしに物思ふ身にはならじと思ふを

忍戀

人まなみたゞにはいはぬ底の色を見しらぬにして過ぎむとやする

不逢戀

我は思ひ人にはしひていとはるゝこれをこの世の契なれとや

待戀

あすの憂さも我が心から悲しきに今宵よ今宵とへやとぞ思ふ

互忍待戀

待つもとふもつゝむに更くる時の間よあぢきなからぬ一夜ともがな

別戀

これ程もまたはいつかの別路をくれよのちよのやすの頼めや

僞戀

今ぞ思ふ頼みしうちの幾あはれかざるが上のなさけなりける

誓戀

憂きが上になげくぞ猶もあはれなる誓ひし末を人のためとて

恨戀

をしや我もあはれ悲しのいくふしをひとつ恨の中になしぬる
憂きにたへず恨むればまた人も恨む契の果よたゞかくしこそ

絶戀

我やたそあやしや遂に絶えはてばあらじと思ふ今日までの身よ

戀涙

戀ひあまり我が泣く涙雨と降れやこのくれしもの雪とづる空

戀契

憂しと捨つる身を思ふにも更に猶あはれなりける人の契りよ

戀恨

淺くしもなぐさむるかなと聞くからに恨のそこぞ猶深くなる

戀

思ひつくし哀にものゝなりたちてすべて涙のたちもとまらぬ
おもひつくす思のゆくへつくゞと涙におつるともし火の影

戀獸

里の犬のこゑを聞くにも人知れずつゝみし道の夜半ぞ戀しき

寄春戀

いろねにもうれへのすゝむ種として我にものうき花鳥のこゑ

寄冬戀

とぢつもる氷も雪も冬のみをとけむともなき我がおもひかな

寄曉戀

いまもこの有明の空に鳥は鳴けど別れし人にまたあはぬかな

寄朝戀

いかになる今朝のながめぞ今夜我見るとしもなの夢の名殘に

寄夕戀

西の山にくだる夕日の影見ればけふはたくれぬ妹を見なくに

寄風戀

なにぞこのうはの空より吹く風の身にあたるさへ物の悲しき

寄雨戀

妹が上に思ひうらぶれねずて明すこの夜すがらの雨の音はも

寄霜戀

朝霜のむすびもはてぬ契りゆゑさてこそけなめ知る人をなみ

寄煙戀

我が戀よ煙もせめてたちなゝむなびかぬまでも君に見ゆべき

寄山戀

あはれ今はかくて契やつくば山しげきうらみの我もそふころ

寄松戀

人や憂きさもいはしろのむすび松むすばぬ世々の身の契こそ

寄庭戀

妹待つと時ぞともなきながめしてよもぎが庭も霜枯れにけり

寄苔戀

そのまゝにはらはぬ庭の苔の□にたえにし人の跡も見えけり

寄鶏戀

わかれましつらからましと聞くもつらし八聲の鳥の明方の聲

寄鳥戀

月に啼くやもめがらすは我がごとく一人寝がたみ妻や戀しき

寄犬戀

人知れず我がたゝずまむ宿のあたり咎むる犬もせめてなつかし

寄人戀

思ひこりしそのいつはりのならひゆゑ人にも人の猶頼まれぬ

寄夢戀

行きて通ふ夢てふものゝあるならば今宵の心見えざらめやも

寄心戀

うきはさぞな哀なるさへくるしきに人の心のなべてならなむ

寄言戀

人を思ふ世にふりざらむ言の葉の君にはじめていはまほしきを

寄鏡戀

おもふ色のいはれぬきはをうつしみせむ鏡もがなや君が心に

寄衣戀

戀しとてかへさむとはたおもほえずかさねしまゝの夜の衣を

寄燈戀

さぞやげに我ぞつれなき待ちよわる明方の窓に消ゆるともし火

寄書戀

見しぞかしかゝる言の葉そのふしと更に涙もふるきたまづさ

戀

戀といふ名のみはなべてふりぬめり我が思をばいかゞいはまし

戀しきは忍びがたきをいかゞせむうき身をしる□慰めもあり

雜

曉

雲のいろ星のひかりも同じ空の長閑になるやあかつきになる

竹

もゝしきの庭に見なれし吳竹のみじかきよこそ猶あはれなれ

風になびく竹のむら〳〵すゑ見えて夕日に晴るゝ遠の山もと

山

山松のこずゑをわたる夕あらし軒のひばらにこゑ落ちぬなり

河

よどみしもまた立ちかへり五十鈴河ながれの末は神のまに〳〵

風雅集第二句「また立歸る」に作る、

橋

とまる名はながらの橋のはしばしら朽ちて後しも猶殘りける

旅

旅にして妹をこひしみながめをれば都のかたに雲たなびけり

雜

小夜更くるまどの燈火つく〳〵と影もしづけし我もしづけし

心とてよもにうつるよ何ぞこれたゞこのむかふともし火の影

むかひなす心にものやあはれなるあはれにもあらじ燈火の影

更くる夜の燈火の影をおのづからものゝ哀にむかひなしぬる

すぎにし世今ゆくさきを思ひうつる心よいづらともし火の下

燈火に我もむかはずともし火も我にむかはずおのがまに〳〵

雜曉

光厳天皇

風雅集第四句「さらにさびしき」に作る、

鐘のおとに夢はさめぬるのちにしもさらにひさしき曉のとこ

雑夕

鳥かへるそともの杜のかげくれてゆふべの空は雲ぞのどけき

山家

聞きわびぬまくらの山の夜の嵐世の憂きよりはすみよけれども

軒につゞく檜原が山に雲おりてくるゝ木ずゑに雨おちそめぬ

田家

伏見山門田のすゑは明けやらで松のこなたのそらぞしらめる

懐舊

忍ぶべき昔はさぞな何となく過ぎにしことのなぞあはれなる

述懐

たゞしきをうけつたふべき跡にしもうたてもまよふ敷島の道

舟もなくいかだも見えぬ大河に我わたりえぬみちぞくるしき

夢

花の中にあそぶこてふの百年にさむるうつゝは猶やみじかき

あつき

庭の日は木蔭も見えず照りみちて風さへぬるみくれがたき頃

はかなき

我もさぞあすともなしの今日の世にあればあるてふ篠蟹の絲

おもしろき

時にふるゝなさけのうちも心すむは月にしらむる絲竹のこゑ

物名

紅葉の賀

をりみだれよもの山邊に雲もみち野風はげしみ雨になるくれ

ほたる

降りうづむ雪に日數はすぎのいほたるひぞし□き山かげの軒

ふぢばかま

ふるさとやちぐさが庭の花の秋かきねの露にまつむしのこゑ

たけかは

今年またはかなく過ぎて秋もたけかはる草木の色もすさまじ

やどり木

月かげはまだ中空にのどけきをはや鳥きこゆあけぬこのよは

風雅集第四句「たるひぞしげき」に作る、

〔以上光厳院御集〕

霞を

天の原おほふかすみののどけきに春なる色のこもるなりけり

百首の御歌の中に春

つばくらめ簾の外にあまた見えて春日のどけみ人かげもせず

かをり匂ひのどけきいろを花にもて春にかなへる櫻なりけり

みなそこの蛙のこゑもものふりて木ぶかき池の春のくれがた

このごろのふぢ山吹の花ざかりわかるゝ春もおもひおくらむ

夏の御歌に

風わたる田面のさなへ色さめて入日のこれるをかのまつばら

百首の御歌の中に秋

更けぬなり星合のそらに月は入りて秋風うごく庭のともし火

川とほき夕日の柳きし晴れてさぎのつばさにあきかぜぞ吹く
草むらの蟲のこゑより暮れそめて眞砂のうへぞ月になりぬる

秋の御歌に

濡れて落つる桐の古葉は音をおもみあらしはかろき秋の村雨

時雨を

夕日さす落葉がうへに時雨過ぎて庭にみだるゝうきぐもの風

百首の御歌の中に戀

たまさかの夜をさへ分くる方のあれや鳥の音をだに聞かぬ別路
それまでは思ひ入れずやと思ふ人の恨むる節ぞさては嬉しき
世々の契いかゞ結びしと思ふたびに始めて更に人のかなしき
戀しとも何か今はと思へどもたゞこのくれを知らせてしかな
知らざりし深き限はうつりはつる人にて人の見えけるものを

戀の御歌の中に

待ち過す月日の程をあぢきなみ絶えなむとてもたけからじ身を

戀の歌とてよませ給うける

いふきはは及ばぬ憂さの底ふかみあまる涙をことの葉にして

雜の御歌の中に

夜鳥はたかき木ずゑに鳴きおちて月しづかなるあかつきの山
夕日かげ田面はるかに飛ぶ鷺のつばさのほかに山ぞ暮れぬる
照りくもりさむきあつきも時として民に心のやすむ間もなし

五首の歌合に雜遠近を

雲かゝる遠山松は見えずなりてまがきのたけに雨こぼるなり

百首の御歌の中に雑

治まらぬ世の爲のみぞうれはしき身の爲の世はさもあらばあれ

神祇を

頼むまことふたつなければ石清水一つ流れにすむかとぞ思ふ

百首の御歌に神祇

祈る心わたくしにては石清水にごりゆく世を澄ませとぞ思ふ

〔以上風雅集〕

春の御歌の中に

春の夜のおどろく夢はあともなしねやもる月に梅が香ぞする

觀應元年三月三首の歌講ぜられけるとき池上藤と

いへることをよませ給うける

ときはなるみぎはの松にかゝるより花もひさしき池の藤なみ

三十首の御歌の中に里時鳥といへることをよませ

給うける

いと早も里なれにけりほとゝぎす卯の花垣にをちかへり鳴く

古き歌の詞にてよませ給うける御歌の中に「つまふ

く風の」といへることを

唐衣つま吹くかぜの身にしむはうらさびしかる秋や來ぬらむ

曆應三年八月十五夜三首の歌講ぜられけるとき月

出山といふことをよませ給うける

藤葉集第一句「雲もなき」に作る、

雲もなくゆふべの山を出づるより今宵もしるくすめる月かな

曆應三年八月十五夜仙洞にて三首の歌講ぜられけ

るとき野月明といへることを

末遠き千ぐさの露にかげみちて野邊こそ月は照りまさりけれ

貞和二年七月七日三首の歌講ぜられけるとき七夕

契久といへることをよませ給うける

秋を待つ年のわたりは遠けれどちぎりぞ絶えぬかさゝぎの橋

竹林院入道左大臣の三十三年の法事のついでに永

福門院の御事おぼしめし出でゝ彼の院の内侍に給

はせける

めぐりあふ今日の御法の筵にもあらましかばの昔をぞおもふ

曆應三年八月十五夜三首の歌講ぜられけるついで

に人々題を探りて歌つかうまつりけるとき戀月と

いへる心をよませ給うける

我が戀は村雲の空に行く月のあひ見がたくもなりまさるかな

三十首の御歌の中に戀

行きかへり天飛ぶ雲のたよりにも我が思ふ人のことは通はず

戀の御歌の中に

戀しさのたゞ一道になりゆけば憂きにも過ぎてものぞ悲しき

あかざりし契はさてや山の井のむすぶともなくかけ離れつゝ

乍臥無實戀といへることをよませ給うける

戀ひ〳〵て待ち見るかひもなよ竹の徒臥しに明けぬこの夜は

いかなりける時にかよませ給うける

見し人は面影ちかきおなじ世にむかしがたりの夢ぞはかなき

雜の御歌の中に

夏草のしげみをすてゝのがれ入る山路の苔もつゆけかりけり

水の上に鳰の浮巣のうきながら住めば住まるゝあはれ世の中

寄衣雜といふことをよませ給うける

月に見し豐のあかりの小忌衣ころもむかしにへだてきにけり

述懐の歌とてよませ給うける

あらましの末通りける山水のこゝろすまでは住むかひもなし

貞和の百首の歌めされし時よませ給うける

よつの海すみがたき世の思出にふるきにかへる和歌の浦なみ

文和三年十一月十一日花園院の七年の御佛事に御供養などありて後山中より勅書のついでに

思ひやれ跡とふ霜のふりずのみひとりぬれそふ苔のたもとを

〔以上新千載集〕

春の御歌の中に

妻戀を人にやつゝむ山もとのかすみがくれにきゞす鳴くなり

貞和の百首の歌めされけるついでに夏

夕立の降りくる池のはちす葉にくだけてもろき露のしらたま

貞和の百首の歌めされけるついでに雜秋

伏見山かど田の霧は夜をこめてまくらにちかき鳴のはねがき

貞和二年百首の歌めされけるついでに羇旅

草まくら假寐のつゆに我をおきてともなふ月もあけがたの空

雜の御歌の中に

山里は明け行く鳥のこゑもなしまくらのみねに雲ぞわかるゝ
見し人は面影ちかきおなじ世にむかしがたりの夢ぞはかなき

貞和の百首の歌めされけるついでに雜

十年あまり世をたすくべき名はふりて民をし救ふ一事もなし

〔以上新後拾遺集〕

貞和の百首の歌めされけるついでに夏

みそぎ川ふけゆく涙の涼しきはあすの秋こそさきだちぬらし

貞和の百首の歌めされけるついでに冬

鳴きそむるそともの鳥もこゑさむみ霜にかたぶく杜の月かげ

〔以上新續古今集〕

三十首歌よませ給うけるとき春

くれはてゝ色もわかれぬ花の上にほのかに月の影ぞうつろふ
吹きみだる花のしら雪かきくれてあらしにまがふ春の山みち

くるゝ春の心をよませ給うける

花も散りこずゑの鳥もこゑ老いてあはれ今年も春のくれかた

三十首歌よませ給うけるとき盧橘を

心には近きまもりのたちばなのたちなれし世ぞ遠ざかりゆく

三十首歌よませ給うけるとき朝時雨を

今朝の朝け木の葉時雨のふる里に物さびしかる冬は來にけり

三十首歌よませ給うけるとき冬

木の葉にも道はたえにし吉野山かさねてうづむ雪のふるさと

詩歌を合せられけるとき冬夕といふことをよませ

給うける

ふりそむる今朝の雪より雲さえてみぞれになれる夕ぐれの空

三十首歌よませ給うけるとき寄煙戀を

我が思ふ身よりけぶりもたちねたゞ哀と人のなびくばかりに

〔以上藤葉集〕

世をのがれさせ給ひて後西國の方を御覽ぜむと思

召して津の國難波の浦を過ぎさせ給ふに御津の濱

松霞わたりて曙のけしきものあはれなりければ遙

に御覽じて

誰待ちてみつの濱松かすむらむわが日のもとの春ならぬ世に

高野山の奥院にて三日まで御通夜ありて曉に立出

でさせ給ふとて

高野山迷ひの夢もさむるやとそのあかつきを待たぬ夜ぞなき

〔以上太平記〕

謹奉法樂日吉山王七社

神のますをひえの山にすむ月のあまねきかげに我しもれめや

國やこれ民やすからぬ末の世も神かみならばたゞしをさめよ

塵にけがれ濁れる水にすむ月のすむやすまずや神てらし見よ

神に祈る我がねぎごとの聊もわがためならば神とがめたまへ

神とたのむ我もし神にすてられば神の誓のなきにこそあらめ

神と我と二はなしと見る心へだてしなくば見そなはしたまへ

ことの葉の數々神のみそなはゞ後の世までのしるべとをなれ

〔以上宸翰懐紙〕

歴代御製集巻十一終

歴代御製集巻十一

光明天皇

早春梅といふことを

ふりつみし雪もけなくに深山邊も春し來ぬれば梅咲きにけり

夏聲といふことを

風高き松のこかげに立ちよれば聞くもすゞしきひぐらしの聲

秋望といふことを

夕日うつる外面の杜のうす紅葉さびしきいろに秋ぞ暮れゆく

冬の御歌の中に

霜こほる竹の葉わけに月さえて庭しづかなるふゆのさよなか

戀思といふことを

物思ふと我だに知らぬこの頃のあやしく常はながめがちなる

恨戀を

つらさをば憂き身の咎とかこちつゝ哀を猶もさましかねぬる

雜の御歌の中に

西の空はまだ星見えてありあけの影よりしらむをちの山の端

〔以上風雅集〕

春のはじめの御歌

天の戸を明くるを見れば春はけふ霞と共に立つにぞありける

歸鴈の歌とてよませ給うける

春の夜のおぼろ月夜にかへる鴈たのむもとほき秋ぎりのそら

三十首の歌よませ給うける中に春

暮れはてゝ色もわかれぬ花の上にほのかに月の影ぞうつろふ

吹きみだる花のしらゆきかきくれてあらしにまよふ春の山道

春の御歌の中に

春山のかすみのおくの呼子鳥世のかくれがにたれさそふらむ

夏の御歌の中に

うぐひすの忘れがたみに聲はあれど花はあとなき夏木立かな

三十首の御歌の中に夏

こゝろにはちかきまもりの橘の立ちなれし世ぞ遠ざかりゆく

貞和二年七月七日三首の歌めされけるついでに早

涼知秋といふことをよませたまうける

秋來ぬと思ひもあへずあさけよりはじめてすゞしせみの羽衣

秋の御歌の中に

わすれずよ萩の戸口のあけたてばながめし花のいにしへの秋

秋風の夜床をさむみいねがてにひとりしあれば月かたぶきぬ

秋きぬとまだ白露のせきもあへず枕すゞしきあかつきのとこ

冬の御歌の中に

槇の屋に冬こそ來ぬれとばかりを音づれ捨てゝゆく時雨かな

千鳥を

鳴海潟わたる千鳥の鳴くこゑもうらがなしさはありあけの空

貞和の百首の歌めしけるついでに戀の御歌

今宵さへ空しく更くる燈火の消えなで明日もあらむものかは

さてもまたあやしきまでの契かな恨ばかりをおもひでにして

頓阿法師が庵室の庭の松を仙洞にうつされけると

き「友ときく松の嵐も音せずばなほ山里やさびしか

らまし」とかきてむすびつけ侍りけるに御返し

さびしさをおもひこそやれ山里の友と聞きける松のあらしに

雜の御歌の中に

よるの雨の雪吹きはらふ朝嵐に晴れてまぢかきをちの山の端

あす知らぬ身はかくてもや山ふかみ都は八重の雲にへだてゝ

うきも夢うからぬもまたまぼろしの世を慰むる我もはかなし

〔以上新拾遺集〕

崇光天皇

夏の御歌の中に

時過ぎて青葉にまじるおそざくら春は木末にとまるなりけり

秋たつ日よませ給うける

風わたる軒端にそよぐ呉竹のひとよのうちにあきぞ來にける

神祇をよませ給うける

鈴鹿川やそせの波のたちゐるにも我が身のための世をば祈らず

戀の歌とて詠ませ給うける

沈むべき身をば思はずなみだ川ながれて後の名こそ惜しけれ

懷舊の心をよませ給うける

瀨をはやみ行く水よりもとめがたく過ぎし昔ぞなほ忍ばるゝ

〔以上新千載集〕

春の御歌の中に

今ぞ知る雪にまがひし花の色は山の端とほきよそめなりけり

ながれてはいづくに春のとまるらむ花ちりかゝる山川のみづ

首夏をよませ給うける

今日もなほかすむ外山のあさぼらけきのふの春の面影ぞ立つ

五月雨のこゝろを

山ふかみ晴れぬながめのいとゞしく雲とぢそふる五月雨の空

待郭公といふことをよませ給うける

みじか夜を幾夜あかしつほとゝぎすたゞ一聲の初音待つとて

七夕地儀といふことをよませ給うける

天の川としのわたりは遠けれどながれてはやく秋も來にけり

冬の御歌の中に

谷川やむすぶこほりの下むせび流れもやらぬおともさむけし

冬望といふことを

冬ふかみさびしき色はなほそひぬかり田の面の霜のあけがた

雜の御歌の中に

しきしまの道は正しきみちにしも心づからやふみまよふらむ

〔以上新拾遺集〕

百首の歌めされしとき忍戀

なほざりにおさふる方もありけりともらば涙を人やかこたむ

百首の歌めされしとき絶戀

こと浦に心をかけしかた帆よりあとまで知らぬ中のはやぶね

百首の歌めされしついでに寄書戀といへるこゝろ

をよませ給うける

こゝろにも今は殘らぬ契とやいとひしほどのおもかげもなき

百首の御歌に戀

ころもでよさのみな濡れそ萬代の御坂を越ゆる戀のみちかは

戀の御歌の中に

祈りこし幾年なみのみたらひにかけぬ御祓はいふかひもなし

心よりかはる契のすゑなればおどろかしてもかひやなからむ

永和四年八月十五夜三首の歌講ぜられしついでに

月前別戀

つらき名のたぐひまでやはかこつべき別れし袖の有明のつき

をのこども題を探りて卅首の歌つかうまつりける

ときめ變戀といへることをよませ給うける

たのめこし淺茅がすゑに秋暮れていまはの露を袖にかけつゝ

百首の歌めされしついでに述懷

露も我が知らぬ言葉の玉なれどひろふや代々のかずに殘らむ

百首の御歌の中に雜

夕汐の引く方とほく見わたせば雲にかけたるあまのうけなは

永和元年三月廿三日松樹春久といふことを講ぜら

れしついでに

十かへりの花を今日より松が枝にちぎるも久しよろづ代の春

〔以上新後拾遺集〕

月の御歌の中に

ながづきや月さへ今はありあけのかげにすくなき秋の色かな

鷹狩といへる心をよませ給うける

御狩せし狩場のあとも今は世にあはれ交野のゆきのふるみち

待空戀といへることをよませ給うける

人目には待たぬになせど終夜さてもいまはのとりの音ぞうき

里竹といふことをよませ給うける

いつまでか里の名におふ吳竹の伏見にのみもわが世つくさむ

〔以上新續古今集〕

六十番歌合に初春をよませ給うける

むらさきの袖をつらねしおもかげのかすみも幾重けふの初春

六十番歌合に春夕月を

ゆふぐもり霞にわかぬ山の端にまたれぬ月ぞしたにほのめく

花色似雲といふことをよませ給うける

花なれや夕ゐる雲にまがひつゝ日かげのあとに匂ふまつばら

御ぐしおろさせてのころ人々に花の歌あまためされけるついでに花散水といふことをよませたまうける

散りかゝる花のかたみの埋水ありしにかはるかげもはづかし

六十番歌合に秋視といふことをよませ給うける

おほかたの秋を時にてものごとにあはれのきはをみ山べの月

秋砧のこゝろをよませ給うける

われさへもうれへをくだく長月や夜寒のきぬた霜にうつこゑ

里竹をよませ給うける

いくとせのかはらぬ色に年もへぬなれてふしみの里のくれ竹

六十番歌合に戀色といふことをよませ給うける

やちしほに染めてもあかぬ袖の色を只なほざりの涙とや知る

六十番歌合に忍戀を

いかにせむ下に思ひのふかみ草さても色には出でむものかは

題をさぐりて人々歌つかうまつりけるとき戀燈と

いふことをよませ給うける

影よわみはやあけがたの燈火のさてもよわらぬわが思ひかな

〔以上菊葉集〕

後光嚴天皇

春二十首

立春

九重に八重のかすみもたちそひて雲のうへにや春は來ぬらむ

霞

見しまゝのゆきだに消えぬ山の端に春をおそしと立つ霞かな

おりはへて野にも山にも立ちきつゝ霞ぞ春のころもなりける

鶯

鶯のものうかる音もなきかへてわが身さかゆく春にあふらし

若菜

蹈分けて野澤の若菜今日つまむ雪間をまたば日かずへぬべし

春雪

あやなくも花の名だてに淡雪の梅が枝にしも散りまがふらし

梅

まださかぬ木末もしばしにほふなり梅が香さそふよその嵐に

咲きにほふ軒端の梅の花ざかりさそはぬほどの風はいとはじ

柳

吹く風のこゝろもしらでひとかたになびきなはてそ青柳の絲

春雨

ふるとしもさだかに見えぬ春雨に花のしづえの露ぞおちそふ

歸鴈

ゆくすゑは霞にきえてはるゝと聲のみかへる鴈のひとつら

春月

いくたびか朧月夜とうらみましかすみを春にならはざりせば

花

うたてわが心なるべき宿にさく花しもなどかつれなかるらむ

永き日のくるゝも知らずわけきつる山のかひある花の夕ばえ

あぢきなくうき世の春の色見えてうつろふ物と花やちるらむ

さそはるゝうきもわすれて見つるかな花ふきみだす春の夕風

庭にだにとはぬ嵐をかこたばや散るをば花のとがになすとも

欵冬

よしさらば花をもめでじ山吹の咲きては暮るゝ春しうければ

藤

十かへりの松の花ともおもはましみどりを見せてかゝる藤波

暮春

ちりはつる花の跡さへ淋しきにいかにせよとて春のゆくらむ

夏十五首

更衣

たちかふるそではひとへにうすくとも花の香のこせ蟬の羽衣

郭公

村雨の雲間の月をしるべにていとゞ待たるゝほとゝぎすかな

新千載集第三句「淋しきを」に作る、

人もまたかくや聞くらむ時鳥わが待ちえたる夜半のひとこゑ
あかずなほしばしかたらへ郭公いかに待たれし初音とかしる

早苗

あらたまの年もゆたかに早苗とる田のもおしなみ賑ひにけり

盧橘

うつしうゑし昔をかけてかたらなむ代々のみはしにほふ橘

五月雨

さみだれはあやめの草のしづくよりなほ落ちまさる軒の玉水
あやにくに見るべき月のよごろしも晴間まれなる五月雨の空

夏月

月影の入るをも待たであくる夜のをしむにつらき山の端の空

新拾遺集第四句「しけきうき世に」に作る、

夏草

夏草の道あるかたは知りながらことしげき世を猶まよふらむ

鵜川

夕やみのゆくへしられて鵜飼舟たえ〳〵見ゆるかゞり火の影

螢

しげりあふ夏野の草をふく風に露もほたるも散りまがひつゝ

夕立

見るまゝに外山のみねは雲はれて夕立すぐるかぜぞすゞしき

納涼

名にしおへば清く涼しきすまひして我宿からは夏もいとはじ

夏祓

みそぎする河瀬に秋やかよふらむ麻の葉ながす風ぞすゞしき

秋二十首

早秋

秋とだにしられぬ桐の一葉にもきゝしにかはる風のおとかな

七夕

ゆくすゑの秋をもてらせ七夕にこよひたむくる庭のともし火

荻

わきてなど荻の葉にのみのこるらむほどなくすぐる庭の秋風

萩

秋をへて古枝に咲ける萩の戸の花もむかしのいろやかはらぬ

鴈

新拾遺集第一第二句「へだつとは見えてまどほく」に作る、

へだつとは見えてまぢかく聞ゆなり霧のうへゆく初鴈のこゑ

鹿

妻戀の道やまどへる小男鹿の野はらしのはら過ぎがてに鳴く

秋夕

何となくわが身ひとつの秋ならぬ夕のそらもかなしかるらむ

秋田

おのづからひかぬなるこも音たてゝ田の面の庵に風ぞもりくる

月

さしのぼる月のためとや晴れぬらむ秋かぜまたぬ山の端の雲

ゆくへなくたゞよふ雲を吹きかけて風にもしばし曇る月かな

あまの川雲のみをゆくほどよりはふけざりけりな秋の夜の月

たれもしれをばすてならぬ月をみてなぐさむやとの秋の心を
すみなれし世々の昔のこととはむしばしやすらへ雲の上の月

蟲

うらがるゝ淺茅がすゑの秋かぜに露をよすがと蟲や鳴くらむ

霧

里人のあさけのけぶりたちそひて霧はれやらぬをちの一むら

擣衣

きくからに民の心もあはれなり夜さむを時ところもうつこゑ

菊

うつし植うる雲居の庭のしらぎくは九重にこそ花も咲くらめ

紅葉

たつた山しぐれもまたで色づくやこゝろづからの梢なるらむ
秋の色にそむる時雨やたてもなくぬきもさだめぬ錦なるらむ

新千載集第二句「そむる紅葉や」に作る、

九月盡

今日のみと秋を慕はぬゆふべだになほざりにおく袖の露かは

冬十五首

時雨

したひこし秋のわかれのなみだより袖ほしあへぬ初時雨かな

新拾遺集第四句「袖もほしあへぬ」に作る、

落葉

さそはれし木々の紅葉はちりはてゝ尾上の松にのこる山かぜ

霜

いとゞしく枯間の尾花しろたへの袖にまがへとおける霜かな

新拾遺集第四句「嵐もさやぐ」に作る、

寒草

かぎりあれば秋もかくやはきゝわびし嵐もさむき霜のした荻

氷

人しれぬ木の葉のしたの埋水こほればいとゞありとしもなし

冬月

ちりはてし杜のこずゑはさびしくて松の雪かと見ゆる月かげ

千鳥

あつめこし代々のあとゝて濱千鳥わが名もかくる和歌の浦波

水鳥

霜はらふをしの羽風のさゆる夜は我さへとけて夢もむすばず

霰

かきくれてふるや霰のたまざゝにしばしもとめずはらふ山風

雪

もろ人のあしたをいそぐほど見えてはやあとつくる九重の雪

道しあれば我世もなどか白雪のふりにし跡にかへらざるべき

消えあへぬ昨日の雪のそのまゝに凍るまでとやまた積るらむ

鷹狩

きゞす鳴く野邊の落草ふみわけてたなれの鷹を合せつるかな

炭竈

たちのぼる煙の末をしるべにて道にまよはぬ小野のすみがま

歳暮

つながれぬ月日ながらも今更にくれゆく年ぞおどろかれぬる

戀二十首

寄風戀

吹きはらふ風にはいかゞことづてむうはの空なる思なりとも

寄雲戀

我方にへだてゝつらき天雲のよそにうき名のいかでたつらむ

寄煙戀

たく火にもいかゞ思はむ富士のねの煙はたえぬ名にたてれども

寄杜戀

くちはてむ後ぞかなしき思ふともつひにいはでの杜のした草

寄關戀

たちわかれ又いつとだに白河の關路はるかに名をやへだてむ

寄橋戀

我中はをだえの橋のたえ〳〵にまたもあふよを待ち渡りつゝ

寄藻戀

いかにせむ我に心をおきつ藻のなびきもはてずつらき契りは

寄篠戀

うきふしもげに忘られでをざゝ原一夜の夢をあはれとぞ見る

寄杉戀

あはれとやさすがうけゝむ祈りこしるしは今ぞ三輪の神杉

寄鳩戀

心だにかよはゞなどかにほ鳥のあしまをわくる道もなからむ

寄猪戀

新千載集第五句「つらき契りを」に作る、

よひ〳〵にふすゐの床のかるもかき思ひ亂れてあかす比かな

寄蛛戀

今こむと契りし暮をさゝがにのいと苦しくも身にたのむかな

寄鏡戀

うつりゆくつらさばかりのます鏡かたみばかりの影も殘らず

寄枕戀

しらざりきその曉をかぎりとも我にはつげのまくらならねば

寄筵戀

いたづらにいくよの塵のつもるらむうちもはらはぬ床の狹筵

寄衣戀

よそにのみへだつる中の唐衣きつゝなれにしうつりがもなし

新千載集第二句「人のつらさの」に作る、

寄劍戀

おのづからめぐりあひても下紐のとけてぬる夜ぞ少かりける

寄弓戀

今ぞうきかはるちぎりのしらま弓なびきそめてし心よわさは

寄舟戀

かずならぬ身はうき舟のいつまでかよるべ渚に思ひくだけて

寄鐘戀

忘れてはまた歎かるゝゆふべかな聞きしにもあらぬ入相の鐘

雜十首

曉鷄

事しげきわがならはしにおきなれて聞けば夜深き鳥の聲かな

夜燈

うたゝねの夢はさめゆく窓のうちに猶ともし火の夜を殘すらむ

浦松

志賀の浦や浪路はるかに見渡せば夕日にのこるからさきの松

庭竹

昔たれうつしそめけむこゝのへに世々をかさぬる庭のくれ竹

山家

かれずとふ松のあらしの吹かぬまや猶山里のさびしかるらむ

田家

小山田のいなばの秋はときすぎてもる人もなき柴のかりいほ

羇旅

かぎりなく遠く來にけり隅田川こととふ鳥の名をしたひつゝ

眺望

まつらがたもろこしかけて見渡せば浪路も八重のすゑの白雲

述懷

なほざりに思ふゆゑかとたちかへり治まらぬ世を心にぞとふ

祝言

代を治め民をあはれむまことあらば天津日嗣の末もかぎらじ

〔以上後光嚴院御百首〕

權中納言爲明のぞみ申す事とゞこほり侍りければ

按察使實繼のもとへ「のぼりえぬこの一坂はたらちねのいさめし道やふみたがへけむ」とよみておくり

侍りけるにこれをきこしめして御返し

たらちねのいさめし末もかはらねば今一坂のみちはまよはじ

うへのをのこども松有佳色といへることをつかう

まつりしついでによませ給うける

色かへぬ松の千年をとりそへて我がゆくすゑもよろづ代の春

〔以上新千載集〕

春の御歌の中に

かすむ夜は夕ゐる雲のいづくとも山の端しらで月ぞ待たるゝ

吹く風の枝を鳴らさぬ春だにもなにをかごとに花の散るらむ

月前萩といへることをよませ給うける

秋萩のつゆ散る花のすりごろもうつろふ月もかげぞみだるゝ

鹿を

牡鹿なく岡邊のわさ田穂に出でゝ忍びもあへず妻や戀ふらむ

歳暮忙といへることをよませ給うける

今さらに年の暮ともおどろかずいそぎなれたる朝まつりごと

〔以上新拾遺集〕

應安六年仙洞にて二十首の歌講ぜられしついでに

なほさゆる雪げの空のあさみどりわかでもやがて霞む春かな

延文二年百首の歌めされしついでに旅

露はらふたもともいとゞほしわびぬ山わけごろも日數重ねて

延文の百首の歌めされしついでに寄蛛戀

篠蟹の蛛のふるまひかねてよりしるしも見えば猶やたのまむ

應安六年三月十八日三首の歌講ぜられしついでに

契待戀といふことをよませ給うける

僞のある世を知らぬ身になしてさはるやかこつ言の葉にせむ

〔以上新後拾遺集〕

延文元年六月内裏にて三首の歌講ぜられけるついでに禁庭夏月といふことをよませ給うける

くもりなき光を添へてたましきのみぎりにすめる夏の夜の月

應安四年二月内裏にてうへのをのこども歌つかうまつりけるついでに月秋友といふことをよませたまうける

月だにも空にすまずば秋の夜のながきをあかす友やなからむ

應安六年九月十三夜三首の歌講ぜられけるとき菊

籬月といふことをよませ給うける

うつろふは見るもかはらで白菊のまがきや月の色はそむらむ

紅葉の十首の歌めされけるついでに紅葉交松といへることをよませ給うける

染めのこす色かあらぬか松が枝の緑をかはす木々のもみぢ葉

貞治六年中殿にて花多春友といへることを講ぜられけるついでによませ給うける

咲き匂ふ雲居の花のもとつ枝にもゝ世の春をなほやちぎらむ

うへのをのこども題を探りて歌つかりまつりけるついでに欲別戀といふことをよませ給うける

今更につゝむもつらき別より惜しと思ふ夜をなほやのこさむ

〔以上新續古今集〕

後圓融天皇

若菜

今朝はまづ野守を友とさそひてや知らぬ雪間の若菜つまゝし

百首の歌めされしついでに浦霞のこゝろを

春きぬと霞のころもたちしよりまどほにかゝる袖のうらなみ

春の御歌の中に

櫻花いまや咲くらむみよしのゝ山もかすみてはるさめぞ降る

落花を

山人のかへるつま木のおひかぜにつもれどかろき花のしら雪

人々に百首の歌めされしついでに夏

つらき名のたつをば知らで時鳥鳴く音ばかりとなに忍ぶらむ

河五月雨といへる心をよませ給うける

三吉野や川音たかきさみだれに岩もとみせぬたきのしらあわ

百首の歌めされしついでに秋

年を經て今日よりほかの逢ふ瀬をば誰がしがらみぞ天の河波

こゝろからあはれならぬの妻戀にたが秋ならぬさをしかの聲

百首の歌めされしついでに萩をよませ給うける

こゝのへや今住む宿の萩の戸もいく世古枝のいろに咲くらむ

百首の歌めされしついでに潟月

夕汐のさすには連れし影ながらひがたにのこるあきの夜の月

人々に二十首の歌めされしついでに秋

天の河雲のしがらみもれ出でゝみどりの瀬々に澄める月かげ

百首の歌めされしついでに千鳥

風による涙のまくらをいとひ来てしほひや床と千鳥鳴くらむ

百首の歌めされしついでに庭雪

峰にまづよそのながめはふりぬれど庭こそゆきの始なりけれ

〔以上新後拾遺集〕

至徳三年仙洞にて人々題を探りて三十首の歌つかうまつりけるついでに見花といふことをよませ給

さくら咲く木の下かげの宿なればほかに尋ねぬみよしのゝ里

永和二年百首の歌めされけるついでに鷹狩を

御狩せし野守のかゞみ昔をばうつさぬ世にもなほやすむらむ

至徳四年七月七日仙洞にて七首の歌講ぜられけるついでに暮山鹿を

しぐれゆく外山の雲に鳴く鹿のおもひや晴れぬ秋のゆふぐれ

〔以上新続古今集〕

後小松天皇

春二十首

立春

たちかへる神代の春やしるからしたかまがはらに霞たなびく

山霞

ふじのねの雲居にまがふ煙よりしたにかすみて春や見ゆらむ

浦霞

春やさてみるめも波にまがふらむ霞をかづく伊勢のあまびと

若菜

春淺く若菜はまだき野邊に出でゝ雪見むためと人やおもはむ

梅

袖になほあまらぬほどは梅が香のまたむせびくる春の夕かぜ

うつしてはまづわきかねぬ梅が香もしみふかき夜の袖の月影

河柳

青柳の枝こすなみのたにがはやすゑはかけひの軒のいとみづ

歸鴈

たがためのつらき別ぞそらなきの聲してかへる春のかりがね

春月

晴れぬべき恨はいつの春ならむことしも月のまたかすみぬる

春雨

人しれず待たるゝ花のかぞいろとはやなつかしき春雨ぞふる

花

吉野山たかねのさくら咲きいでゝおよばぬ雲の色になりぬる

秋の夜の月とはいはじ春ごとのはなにめでゝも老となるもの

ちる花のうき世を人の歎かずばたが身の夢としられざらまし

春曙

花もなく月ものこらぬ比をしぞおのがものなる春のあけぼの

苗代

なはしろの畔もしどろに行く水のすみもさだめず鳴く蛙かな

野雉

かすみたつ末野のきゞす狩人の跡をいのちと音をや鳴くらむ

躑躅

はるさめに笠取山のいはつゝじ日かげの色にてりかへてけり

松上藤

相生の松にちぎりをかけしよりふぢの千とせや春にそふらむ

里欵冬

春の色ぞわづかに見ゆるふる里に人もすさめぬ庭のやまぶき

暮春

人なみにあくがれ來ても本の身のうきに歸れと春やゆくらむ

夏十五首

新樹

枝かはす木々にもわきてあをによし楢の廣葉やまづ茂るらむ

卯花

よもすがらまがへし月は影きえて雪をまことのけさの卯の花

時鳥

われを待つならひもあらば郭公こぬ夜のうさや思ひしらせむ

雲はやみ降りくる雨のあしびきの山ほとゝぎすわたる一こゑ

菖蒲

ねをかけぬたが袖ゆゑに殘りきて沼のあやめの露こぼるらむ

五月雨

ふりて世にすむかひもなし五月雨の雲の底なるありあけの月

里樗

時鳥たゞは過ぎじと見えてけりあふち木ぐらき里のをちかた

庭橘

夢さめてむかしもとほき手枕にわすれがたみの軒のたちばな

夏月

それならぬ草木にすむもいかならむいさゝをざゝの短夜の月

夏草

夏草のふかきこゝろの色ながら跡□のみちにまよふはかなさ

照射

妻ごひの秋にもならば思ひしれしか待ちあかすしのゝめの空

鵜河

うきしづみあはれにもゆる篝かな鵜船の後のゆくへ知らずも

夕立

ゆふだちの名殘ながらも朝日山日かげは峯にさしのぼりつゝ

晩蟬

木の間もる日影やうすき鳴く蟬も下枝にうつるゆふぐれの聲

荒和祓

御祓する麻のみだれは取りすてゝそよやかへさの袖の秋かぜ

秋二十首

初秋露

袖のうへまくらの下もうちしをれわきえぬ秋の露のあけくれ

七夕

たゞ一夜袖ほすゆゑぞみなし川秋よりさきの名にはながれじ

荻風

吹きむすぶ軒端の荻の露ながら消えゆく夢のあとのあきかぜ

野外萩

おく露もふかくや秋のなりぬらむ野邊の眞萩の花かはるまで

薄

こと草は咲きこぼれても花すゝきなびく姿に似るものぞなき

女郎花

すりごろもそれにはあらぬ女郎花など山藍に咲きて見ゆらむ

蟲

思ありと聞きふすからに秋の夜のふくるはかなし松蟲のこゑ

秋夕

やよしばし軒の一葉の夕あらし袖のなみだのもろさくらべむ

深夜鹿

なほざりの小夜の寢覺のものぞとや涙をもみぬさをしかの聲

江鶉

あしたづのたづぬるあとか濱川の入江の波にうづら鳴くらむ

月

月いづるやまとしまねもうかぶなり波もいなみの海の夕なぎ
をばすてや入りぬる月のあとまでも眺めはあかぬ山の端の月
身をてらす影ともあふぎ憂き事をかこつもおなじ秋の夜の月

暮天鴈

折しもあれ聲も色にてわたるなりとよはたぐもの衣かりがね

朝霧

たちのぼる霧よりうへにしぐれけり朝つゆはらふみねの松風

擣衣

夜やさむきうつやころもをしきたへの袖にかさぬる秋の里人

紅葉

庭の草野はらの淺茅うらがれてこずゑにうつる秋のいろかな
龍田姫おもひの色の秋ごとにしのびもあへぬ木々のもみぢ葉

籬菊

置きまよふまがきの霜もふかき夜の有明の月のしらぎくの花

暮秋

しをれしはことの數にもなみだかないまはの秋の袖の夕ぐれ

冬十五首

初冬

神無月たつたの山の雲かぜも木の葉にまがふいろぞさびしき

山時雨

しぐれつゝ暮れてきのふの秋篠や外山の雲のうつりやすさよ

落葉

さらばまた染めも盡さでその儘に薄きもはてはしく木葉かな

枯野風

道のべの尾花もかれて旅人のそでをせばしととふあらしかな

江寒蘆

見るまゝに難波江とほくなりにけり汀のあしの冬がれのころ

千鳥

松たてる磯のうら風さえぬらし由良のとなみに千鳥しばなく

池水鳥

くるゝまで池のさゞなみたつ鴨のをりぬる夜半は氷してけり

冬月

あだにしもうきみの袖をたのむかな草木かげなき冬の夜の月

雪

ふりにけりすがらにさえし小夜衣うらめづらしき今朝の初雪

をのへなるまつよりあまるほどなれや山下里の軒のしらゆき

いかばかり河瀬のなみもこほるらむ林の雪のゆふぐれのそら

鷹狩

面影もたえて幾世になりぬらむ野守のかゞみうけしみゆきは

神樂

神さびてうたふゆだちの本末もよりあひの音のいづれともなく

炭竈

すみがまの煙にきほふ里見えて民のかまどのひまぞしらるゝ

除夜

とにかくに身にも覺えぬ年暮れてなやらふ夜にもなりにける哉

戀十五首

尋緣戀

いかにせむ世語ならずなしはてゝ傳へむ人のあはまほしさに

初戀

いつのまに染めけるいろぞ初紅葉秋だに露もしらぬしをれに

忍戀

色に見え袖にもあだにちらすなよしのぶの露はおき餘るとも

聞戀

思ひ餘り名も立ちぬべく苦しきに聞き劣りせば嬉しからまし

見戀

かくばかり袖をかはさぬ中だにも靡く習ひはありはしらなむ

祈戀

消えかへる命を神にまかせてもなみだの露のかゝるしらゆふ

不逢戀

なほざりに思ふ色とは疑はじうたてもなどかつれなかるらむ

契戀

あだならずわれこそ契れおくの海のいさしらなみの末の松山

待戀

此儘にさしてゐる夜の槇の戸に明けていかなる心地かはせむ

逢戀

今宵こそぬれしたもとも常陸帶の心もとけてめぐりあひぬれ

遇不逢戀

さだかなるうつゝにだにもわかざりきされば戀しき夢の契よ

通書戀

玉づさのその端書のつれなさを思へばしぢのまろねせよとや

惜別戀

さらにこそゆるしもやらね又とだに知らではかなき袖の別路

顯名戀

うき名のみおしあけがたのならはしに又やしのぶと夕暮の空

恨戀

うつりゆく松のひゞきの絶えしより身を秋風のすゑの眞葛葉

雜十五首

曉鐘

世の中の夢もしばしと殘りけりあかつきごとの鐘のひゞきに

名所山

言の葉もふもとの塵のかずとだにつもらばゆるせ玉つしま山

名所浦

田子の浦や興津の波はさもあらばあれ富士の煙の立たぬ日もなき

古松

名にしおふそのかみよりや千年山峯なる松も生ひはじめけむ

栽竹

吳竹のはしに我身はなりぬともうゑてや世々のかげを賴まむ

幽徑苔

やまざとの下樋に水の道はあれどうへなる苔を人はかよはず

鶴

今ははやわが身ふりゆく霜の鶴雲居におよぶいろぞかひなき

鷺

まがひつゝころしもわかず飛ぶ鳥の鷺坂山にふれるしらゆき

河舟

日くるればこもかり船ものぼるなりかへさやいそぐ淀の里人

旅宿

野邊の露はたがならはしとむすぶらむ夢もとまらぬ草の枕に

旅泊

都おもふゆめも波路にまよふなりやどかる月も袖にくだけて

山家

あはれなる花のさかりも杉の庵にすむ人ありと三吉野のおく

海眺望

名もとほき難波の宮のあととては高津の海のすゑのしらなみ

述懐

身の程に身をもくらぶる身なりせば愚なる身を身とや賴まむ

寄神祝

あしはらの國常立のはじめにていく代をまもる神となりけむ

〔以上後小松院御百首〕

寒月

霜がれのころさへ月のやどりにて千年のかげぞ松にのこれる

後小松天皇

浦雪

しひてふるわが名もかけよ和歌の浦の玉藻の雪のあとの白波

神祇

蘆芽と見えしかたちをはじめにて國つやしろの神のかしこさ

〔以上應永十四年十一月二十七日内裏九十番御歌合〕

立春氷といへることをよませ給うける

志賀の浦や寄せてかへらぬ浪の間に氷うちとけ春は來にけり

百首の歌よませ給うける中に春

花ぞなほ峰より奥に咲き初めて雲にあとなきしをりをぞする

更衣の心をよませ給うける

よしさらばあだなる色を名に立てゝ今朝こそかへめ花染の袖

野外夏草

みゆきせし千世の古道あとゝとぢてたゞいたづらにしげる夏草

夏の御歌の中に

今年生の竹のさ枝のみじかよに葉わけの月も見るほどぞなき

百首の御歌の中に海月

秋の夜の月にやはらふわたつ海と荒れにしまゝの床のうら風

義仁法親王月の頃栂尾よりまかり出でゝ内裏近き

所にやどりてよもすがら琵琶を彈じ侍りけるを遙

にきこしめしておほせごとありける

弓張のなかばの月のかげよりもなほ澄みまさる四の緒のこゑ

二十首の歌めされけるついでに擣衣何方といふこ

とをよませ給うける

かたいとのよるの衣をうつ音はこなたかなたの里もさだめず

明徳四年三月内裏にて松契萬春といへる題を始めて講ぜられけるついでによませ給うける

みどりそふる大内山のまつの葉はやほよろづ代の春のかずかも

百首の御歌の中に賀

むしろ田のいつぬき川の河水とすむてふたづといづれ久しき

浄土の法文など聞しめしけるついでに嵯峨の奥に往生院といふ寺のあるよし人の申しければよませ給うける

皆人の行きて生るゝやどりこそうき世のさがの西にありけれ

旅宿の心をよませ給うける

かりしくもうすき尾花のたもとかな松が根さむきつゆの枕に

初戀の心をよませ給うける

おもひ河岩間の波のうちつけにせきあへぬ袖の玉ぞくだくる

寄瀧戀といふことをよませ給うける

いつよりか妹背のなかに落ちそめて吉野の瀧を袖にせくらむ

相互忍戀といふことをよませ給うける

しのぶ草葉末の露のみだれあひてきえば消ゆべき限をぞ待つ

寄鳥戀といふことをよませ給うける

おもかげをよそに見つゝや山鳥のはつをの鏡へだてはつべき

寄傀儡戀といふことを

またむすぶ契も知らできえかへる野上のつゆのしのゝめの空

權中納言清長身まかりて後手ならし侍る扇を御覽じて年久しくつかうまつりけることなどおぼしめし出でゝ

のこし置く扇の風もかなしきはわかれし草のかげのしらつゆ

渡霞といふことをよませ給うける

紀の海や由良のみなとのあさぼらけ霞のにはに舟こぐらしも

月の御歌の中に

雲居よりなれにし月のかひもなく身を照すべき時も過ぎぬる

山家友といへることをよませ給うける

なほふかく思ひも入らば山里の友をも捨つる世とやなりなむ

百首の御歌の中に雜

あはれなり小田もる庵におくかび（野火）の烟や民のおもひなるらむ

位におはしましける時百首の御歌の中に曉寢覺と

いふことをよませ給うける

この頃は鳥のつかさも告げたえて我とおどろくあかつきの夢

竹爲師といふことを

こゝのへや庭の河竹かはらねば代々の跡あるしるべとぞ思ふ

百首の御歌の中に獨述懷といふことをよませ給うける

あきつばの　すがたの國と　定めおきし　大和しまねの

そのかみを　思へばひさに　へだゝりて　あまのかぐ山

いづる日の　とこ闇なりし　ほどもなく　晴れてさやけき
かみよより　みもすそ河の　すみそめて　ともに濁らぬ
いはしみづ　ながれは遠く　なりぬれど　この身違はず
よつの海の　波ををさむる　名をかけて　おほうち山の
まつの葉の　年のかずのみ　つもれども　民をしすくふ
ひとことも　難波のあしの　みごもりに　何のふしだに
あらはれず　されどこゝろに　おこたらず　世を思ふ程は
ひさかたの　空に知らむと　あふぎつゝ　雲居のつきの
いくめぐり　へにける方を　かぞふれば　二十年あまり
いつたびの　八隅しるてふ　ちかき代の　ためしにさへも
越えぬれば　さやのなか山　なか〳〵に　おろかなる身を

はづかしの　杜のしたぐさ　さらば道ある
いにしへの　世にも還さぬ　なげきのみ　つもる月日は
いたづらに　なす事もなき　ながめして　花ももみぢも
をり〳〵の　なさけはありと　知りながら　かづらの枝も
をりまよひ　和歌の浦路の　たまもをも　かきえぬ程の
はかなさに　色をも香をも　しらなみの　よし野の川に
みがくるゝ　いはとがしはと　うづもれて　はるけむ方も
なよたけの　世の人はみな　なつびきの　絲のひき〳〵
みだれつゝ　よりもあはねば　たれにかは　こゝろをよせむ
とばかりに　よろづの事の　いぶせくて　秋の木の葉の
散り〳〵に　その色としも　おもほえぬ　筆のすさびは

つゆほどの　ひかりも見えぬ　うらみさへ　忘れはてつゝ
いりえなる　かげの藻屑を　かきあつめぬる

反歌

おもふことを誰にいはまし藻鹽草かきつめてだに慰みやせむ

〔以上新續古今集〕

六十番歌合に春

谷の戸も春にあけゆく時ぞとやさすが道あるゆきのむらぎえ

明徳四年の春伏見殿に、まゐりて久しく侍りける比
ある所に梅のおもしろく咲きたりけるを御覽ぜら
るゝ御ともにまゐりてあそび侍りしことを次の年
の春去年のときわすれがたきよしうけたまはると

て梅が枝につけて從三位政子の許へ

袖ふれし去年の匂をわすれずばおもひもいでよ梅のしたかぜ

三十首の歌講ぜられけるに庭落花を

春ふかき苔のみどりに染められて庭にいろある花のうすゆき

三十首歌めされけるついでに春

花も散り鳥さへかへる夕山やかすみばかりにのこるはるかな

春の御歌の中に

行く春にともなはましをけふもなほ澤田の鴈ぞ歸りおくるゝ

秋の御歌の中に

庭のまつはらふあらしに雪消えて月は軒端のやまを出でけり

伏見殿の前栽に菊を作られて侍るを枝を折りて給

はるとて従三位政子のもとへ

植ゑたてゝさこそ匂もまさり草山路のたねは見るかひやなき

従三位政子みやこの紅葉を折りて伏見なる人の許へ「此枝にみやこの梢おもひやれさこそもみぢはなかめたるとも」と申送りて侍る返事を女房にかはりて御返し

手折り見する情も深きもみぢ葉をいかゞなべての色にくらべむ

伏見殿へまゐりて侍るをりふし雪のふりて刈田のけしきおもしろく見えければ入道前左大臣「稲葉にもなほまさりけりはる〳〵と刈田のおもに降れる白雪」とよみて後に奉り侍りけるに御返し

ことのはの深きなさけに色ぞ添ふ刈田の雪はながめなれしを

五十首の歌講ぜられし中に旅のこゝろを

わけすぐる山より山の旅ごろもなれゆくそでを月もわするな

忍切戀といふことを

色にいでむ涙こそげにかぎりならめ命をきはとしのぶ思ひは

戀の御歌の中に

いかにして人の袖をも染めてしる千しほの涙いろに出づべく

六十番歌合に戀

逢ふと見つる夢をさへまたおどろかすよきは別の鳥と思ふに

寄船戀を

沈めたゞよるべも涙のすて小舟人のうきせになにかたゞよふ

三十首の歌講ぜられし中に聞戀を

なか〳〵にたよりの風もあぢきなし聞きて慰むゆくへならぬに

三十首の歌講ぜられし中に戀

あやにくに待つ夜はふけし鐘の音の別になればなど急ぐらむ

不會戀を

面影もわするばかりにへだてきく又と見ぬ夜の夢ぞあやなき

〔以上菊葉集〕

應永十五年三月北山殿に行幸ありて花契萬年といへることを講ぜられしついでによませ給うける

萬代となべては何はちぎるとも春へむとしぞなほもかぎらじ

〔北山殿行幸記〕

雅縁中納言やみて久しく内へも參らざりけるに程へていさゝか心地おこたりぬるよし聞しめして仰事ありける

月もはやゝ出でぬべき光かな晴れゆくかたの空にまかせて

〔池の藻屑〕

後花園天皇

春二十首

立春

いつしかと空も霞みて出づる日の影のどかなる春や來ぬらむ

霞

今朝見ればまだ春あさき山の端をよそにへだてず立つ霞かな

鶯

いとはやもふるすを出でし鶯の雲居のどけきはるにあふなり

殘雪

春來てもなほふるとしと見ゆるまで殘るぞさむき山のしら雪

野若菜

うちむれてけふ里人やかすが野の雪間もおなじ若菜摘むらむ

里梅

よそまでもにほひぞふかき山里の垣根の梅のさかりなるらし

簷梅

幾春もなれてぞ見ましこゝのへの軒端にちかくにほふ梅が枝

春月

雲晴れてかすみは殘るたかねよりおぼろに出づる春の夜の月

春曙

有明ものこらぬ空のなにとなくかすみわたれる春のあけぼの

歸鴈

あさぼらけ雲路しのぎてかへるらし霞にとほき春のかりがね

春雨

かきくらし降る春雨のいとゞなほ野邊の草葉の色まさるなり

柳

吹くからにいとくりはへて青柳のつゆの玉ぬく春のゆふかぜ

待花

白雲よしばしなはれそみ吉野の花待つほどのなぐさみにせむ

初花

もゝしきや大宮人のかざしぞとはや見えそむる庭のはつはな

見花

雲も消えかすみも晴れてあしびきの山の櫻のいろぞまがはぬ

盛花

よしの山花のさかりも今ぞとやみねにもをにもかゝるしら雲

落花

吹く風に散りしく花は木の本に消えあへぬ雪とあやまたれつゝ

欵冬

川波は音にたてゝもいはぬいろに見えてぞ咲ける井手の山吹

藤

春をへてみぎはの松に咲きかゝるさかりもひさし池の藤なみ

暮春

惜しめどもつひにとまらず暮れて行く春の別をまたや慕はむ

夏十五首

更衣

今朝よりはたもともうすくたちかへて花の香とほき夏衣かな

卯花

咲きそへていとゞ垣根もしろたへの月にぞまがふ庭の卯の花

待時鳥

いたづらにいく夜なゝかねざめして待つにつれなき山時鳥

聞時鳥

月もいまみ山はつらしほと〻ぎす更けゆく空に聲のきこゆる

早苗

せき入れて水ゆたかなる小山田にはやうちむれて早苗とるらし

橘

うた〻ねのまくらにかをる橘のうつり香深きわがたもとかな

五月雨

あすか川淵瀬もおなじみかさにてはれまも見えぬ五月雨の比

夏草

日にそへていとゞ深くやなりぬらむ茂りのみゆく野邊の夏草

夏月

底きよき水のながれにすむ月のかげもよどまぬみじか夜の空

鵜河

見ればまづわが心さへ鵜飼舟このわざのみもなき世ならぬに

螢

あしの葉にみだるゝ露のひかりかと見ゆるは夜の螢なりけり

夕立

夕立の過ぎ行くあとのうき雲ものこる入日のかげぞすゞしき

蟬

風わたる杜のこずゑの夕つゆも落ちて聞ゆるせみのもろごゑ

納涼

吹く風もすゞしくかよふ松かげに夏を忘れて立ちくらしつゝ

夏祓

みそぎする加茂の川風ふくる夜に秋をかけたる波のしらゆふ

秋二十首

初秋

秋來ぬと四方の草木に吹きそへてきのふにかはる風の音かな

七夕

こひ〳〵てあふ夜の袖にたなばたやまだ初秋の露をほすらむ

荻

聞きわびぬ軒端の荻に夜もすがらおとづれてゆく秋風のこゑ

萩

宮城野やさかりと見ゆる秋萩の木のしたつゆも花と散るらし

蟲

あさぢふの露もはらはぬ秋の野によな〳〵しげき蟲の聲かな

鴈

夕ぐれの空吹く風や寒からしきつゝかさなるころもかりがね

鹿

くるよなき妻をうらみて夕ぐれの小倉の山にをしか鳴くなり

秋夕

なにとなくさびしさおもふ夕ぐれの袖におきそふ秋のしら露

秋田

吹きしくと見れば田の面のはる〴〵と穂波の末によわる秋風

山月

うきぐもを嵐のよそにさきだてゝくまなく出づる山の端の月

野月

秋ふかき野原のくさをわけきても露にぞやどる夜半の月かげ

關月

秋寒き不破の關屋の板間あらみ月こそひとりもりあかしけれ

橋月

すみわたる月影とほく引くしほの濱名の橋にかゝるたびゞと

浦月

須磨の浦や浪路はるかにすむ月のひかりをみがく夜半の潮風

菊

年を經て咲きそふ菊のまがきにや老せぬ秋のいろも見ゆらむ

擣衣

月かげのふけゆく空にきこゆなりころも夜寒のころもうつ聲

霧

そことだに梢も見えず立ちこめてゆふぎりふかし秋の山もと

杜紅葉

染めつくす色こそ見えね時雨するはゝその杜の秋のもみぢ葉

河紅葉

うすくこきもみぢ葉ながる神南備のたつたの河は錦なるらむ

暮秋

今はとてくれゆく秋よしたふにもよらぬうらみや長月のそら

冬十五首

時雨

村時雨ふるかた見えて山の端にうつりさだめぬ夕日かげかな

落葉

いろ〳〵に山の木の葉の散りしきて麓の野邊ぞ又にしきなる

霜

冬草になほ咲く花と見ゆるまでむすびそへたる霜のいろかな

寒草

しをれゆく野邊の尾花の袖さむみ朝霜ふかくおきまさるなり

冬月

うす氷いしまの水にかげ落ちてひかりぞさむき冬の夜のつき

氷

岩間ゆくおとぞ絶えぬる谷川の水やさながらこほりとづらむ

霰

木枯のはげしかりつるゆくへとやあられ玉散る夕ぐれのそら

千鳥

さよ千鳥こゑうちそへて風さゆる磯邊の涙のたちゐにぞ聞く

水鳥

冬の池に數かく鴛のひまをあらみ上毛の霜やはらひかぬらむ

淺雪

冬枯の野邊の草葉のいろだにもかくれぬ程にふれるしらゆき

深雪

かきくらし吉野の山に降る雪の日をかさねてや深くなるらむ

神樂

あくるまでうたふ神樂の聲さえて庭火の影もはやしらみつゝ

鷹狩

降る雪をはらひもあへずはし鷹のつかれの鳥を猶たつるかな

炭竈

さびしさはよそまで見えてすみがまの煙をたつる小野の山里

歳暮

いそがれてすぐる月日の程もなく春にちかづく年のくれかな

戀二十首

寄月戀

見せばやな泪ひまなき我が袖に月はよな〳〵やどるならひを

寄雲戀

峯たかみたえずたなびくしら雲の晴れぬ思をいかで知らせむ

寄風戀

うはの空に吹く秋風もをりからや身にしむ戀のつまとなるらむ

寄雨戀

來ぬ人を待つ夜ふけぬる村雨におもひ絶えたる床のさむしろ

寄露戀

忍ぶとも色にやいでむ我が袖になみだの露のおきあまる身は

寄山戀

とけてねばさすが夢にやみわの山待ち見む物をうつゝならでも

寄原戀

しのぶれど人しるらめやあやにくに泪つゆけき小野のしの原

寄海戀

思ふことありその海にたつ涙のよる〳〵かけてぬるゝ袖かな

寄橋戀

逢ふことはをだえの橋となりしより年月かけて戀ひ渡るかな

寄關戀

越えやらで迷ふこゝろのへだてをば人のこたへる逢坂のせき

寄木戀

人知れぬみをの杣木のいつまでかつれなきかたに心ひかまし

寄草戀

忘れゆく人をしのぶの草の葉になみだの露ぞおかぬまもなき

寄蟲戀

身を秋と思ひたえぬる夕ぐれに誰まつむしのなほも鳴くらむ

寄鳥戀

つれなしとゆふつけ鳥のなく〳〵も猶ぞ恨むるきぬ〴〵の袖

寄獸戀

身のよそにきゝもなされず小夜更けて妻戀ひわぶる棹鹿の聲

寄玉戀

いつとなく人ぞ戀しき玉の緒のたえずしたには思ひみだれて

寄鏡戀

日にそへていとゞ思ぞますかゞみ見し面影のくもりはてねば

寄枕戀

よな〳〵は涙のかゝるまくらこそ袖よりも猶ぬれまさりけれ

寄衣戀

思ひあまり夜の衣をかへしつゝうちぬる夢に見るよしもがな

寄絲戀

逢ふことは片結びなるしけ絲のおもひみだれて月日へにけり

雜十首

暁鶏

鳴きわたる八聲の鳥に見る夢もやがておどろくあかつきの空

松

行く末もなほぞさかえむ年を經てみどり立ちそふ庭の松が枝

竹

うゑて見るみかきの竹のふしごとに千代萬代の數ぞこもれる

山家

山ざとの軒端の松におとづるゝあらしの音もときはなるらし

田家

あき過ぎてもる人もなきいほりにもなほ通路の見ゆる小山田

旅

おのづから月にともなふ旅人やよるの關路もさはらざるらむ

浦鶴

今ぞはやかひある時と和歌の浦のあしべのたづの聲も聞ゆる

述懷

いかばかり心をそへてまつりごとすぐなる世ぞと人にいはれむ

神祇

誰人もさぞあふぐらむ神風やみもすそがはのきよきながれは

祝

天つ空くもらぬ時としられてやてらす月日もひかりそふらむ

〔以上後花園院御百首〕

春雪

時知らぬ不二の高嶺も春の色にすそのばかりは雪まどほなる

暁蟲

今ははやとひくる人もあらじとやあかつきよわる松蟲のこゑ

旅宿

かりねしておどろく笹の枕にもうき世の夢はなほさめぬかな

〔以上永享九年住吉社奉納百首〕

浦月

明けぬまもよるとは見えず筥崎やうら波きよき月のひかりに

寄月戀

とはるべき夜半も更け行く月見れば傾くかげを猶したふかな

〔以上永享十年石清水社奉納百首〕

鶯

咲きやらでまだ冬籠る梅が枝に春のくるとやうぐひすの鳴く

冬

降りつみて宮もわらやもなかりけり千里の雪のあけぼのゝ空

初戀

もえいづるわが戀草のたもとまで拂ふばかりに露やおくらむ

〔以上永享十三年松尾社御法樂百首〕

河落葉

うちいづる波もえならぬ色なれや木の葉しぐれしあとの山川

曉千鳥

むれてたつまさごの千鳥かげ見えて有明さむしふきあげの濱

遠嶺雪

まがひにし雲のよそめの花ざくらおもひぞ出づるみねの白雪

忍逢戀

ながれてのうき名もくるし思川あふせの水のあわと消えばや

松歴年

君ならでたれかかぞへむ松の葉のみどりの洞につもる千年も

〔以上寶德二年十一月仙洞歌合〕

庭殘菊

逢ひにあひてうつろふ菊や見し秋の色にもまさるむらさきの庭

水鳥

夜を寒みとけずも物を思ふらむつらゝの床の鴛鴦のひとり寐

松雪深

あらしこす尾上の雪のひとむらや埋れし松のこずゑなるらむ

忍久戀

あぢきなくつもる思も空蟬の世はいつまでと音をしのぶらむ

祝言

うべしこそ我世になびけ葦原やをさまる國のたみのこゝろは

〔以上康正元年十二月十七日内裏歌會〕

梅盛開といへる心をよませ給うける

色も香もたぐひはあらじ咲きみちて軒端にあまる梅のした風

海邊月を

ふけにけり海士のたく藻の煙さへなだの鹽屋の夜半の月かげ

うへのをのこども題を探りて名所の五十首の歌つかうまつりけるついでに三室山を

かげやどす月もしぐれて三室山あきかぜさむしくずのした露

永享九年十月左大臣の家に行幸ありて松色映池といへることを講ぜられしついでによませ給うける

影うつす汀のまつのおなじ枝に八千代をかくる池のさゞなみ

寄船戀といふことをよませ給うける

知られじな霞の浦にこぐ船のほのかにかよふこゝろありとも

無品親王伏見に侍りしころ雪の朝にとしばに雉をつけて奉るとて「御狩せし代々の昔に立ちかへれ交野の鳥も君を待つなり」と奏し侍りし御返事に

御狩せし代々のためしをしるべにて交野の鳥のあとを尋ねむ

述懐の心をよませ給うける

敷島の道ある代々のいにしへに猶立ち越えむ跡をしぞおもふ

〔以上新續古今集〕

御消息のおくに書きつけさせ給へる御歌

あはれ知れ今はよはひも老の鶴の雲居にたえず子を思ふこゝ

〔後花園院御消息〕

永享九年十月室町殿に行幸ありて松色映池といへることを講ぜられしついでによませ給うける

池水のそこにも千世の色しあれやこだかき松のかげを深めて

〔室町殿行幸記〕

後土御門天皇

春二十首

立春

風の聲人のこゝろも今日よりぞのどけかるべき春は來にけり

山霞

春はまた霞のそでをさほひめのたかつの山にふるかとぞ見る

竹鶯

我が友とうぐひすだにもおもへばや竹の臺になれて鳴くらむ

野若菜

心して摘みこそわかめ春日野のおどろまじりに見ゆる若菜を

春雪

とふ人のあともいとはじ春はたゞつもれど消ゆる春のあは雪

行路梅

咲きわびぬゆきかふ人の折りとりて古枝に似なき道の邊の梅

梅風

さえかへり吹きもいとはで梅が香に匂ふ嵐を身にぞそめぬる

柳露

つゆむすぶ柳のかげの川の瀬になびく玉藻もみだれあひつゝ

春雨

霞さへよそめへだてゝふるおともしのぶの山のはるさめの空

歸鴈幽

歸りゆく聲もあまたの天つ鴈かずはかすみに見えわかねども

春日

うしやたゞかたわれ月の折しもあれ殘りの影の猶かすみぬる

寄雲花

にほはずばめづらしげなき雲とのみまがひやはてむ峰の初花

霞隔花

風をこそいとひしものを霞さへつらき名にたつ山ざくらかな

雨中花

春雨のあすさへふらばいかゞせむやゝしをれゆく花の夕ぐれ

風前花

限ありて散るだに憂きを春風のいかにせよとて花に吹くらむ

花如雪

春の日に消えぬばかりぞ花ざくら散るもちらぬも雪の面かげ

苗代

みつしほをいとひやすらむ湊田のなはしろみづは□かくれども

岸欵冬

水底にきしの山吹うつり來てすなのこがねを敷くかとぞ見る

松藤

春を經てよる年なみも藤なみも木だかき松のうへにこそ見れ

三月盡

あかつきは夏とやつげむ夕まぐれ春のかぎりのいりあひの鐘

夏十五首

更衣

たちかへてうすき衣に夏のくる今朝はなか〳〵風ぞさむけき

河卯花

岸をこす波かとみゆる卯の花のうつろふかげも見えぬした水

初郭公

人づてに聞きもならはぬ比をこそ初音とは知れ山ほとゝぎす

郭公遍

誰が里も同じこゝろに聞きつらむ今宵の月に啼くほとゝぎす

盧橘

あれにけり志賀の都のむかしをも花たちばなの香にや殘さむ

菖蒲

わがやどの軒にかりふくあやめ草いづれの沼に根を殘すらむ

早苗

種まきて今はた賤があはれてふことをあまたにとる早苗かな

五月雨

けふいくか天の岩戸も雲とぢて神代おぼゆるさみだれのそら

夏月

うたゝねに誰あかすらむまだ宵と起くると思ふみじか夜の月

夏草滋

夏木立ひとつみどりにおほあらきの杜の下草しげりそひつゝ

蚊遣火

となりまで蚊遣とぞなるほどもなき賤がふせやにうつる煙は

窓螢

我が心くらきにつけて窓のうちにほたるあつむる人ぞ嬉しき

夕立

なるかみの音は高雄の山ながらあたごの峰にかゝるゆふだち

納涼

筑波根のいづくかわきて涼しと□木の本ごとにやどりかへつゝ

六月祓

みそぎして今朝より夏の淵は瀬にかはるもすゞしあすか川風

秋二十首

早秋

いつのまに秋と吹くらむ明くるまでさしも待たれし風のおとづれ

七夕契

いつはりを知らぬ契や七夕のまことながらもうれしかるらむ

深夜荻

荻の葉にむすぼゝれてや秋風のさよもなかばの夢さそふらむ

水邊荻

織りわくるにしきとぞ見る白波の花にまがはぬ間野のうら萩

薄似袖

うちいだすそでぐちなれや玉垂の小簾の大野になびく尾花は

原蟲

秋さむき淺茅が原に鳴くむしのいのちかけたる露もいつまで

曉鹿

長き夜を獨ある鹿のいねがてに妻こひわびて啼きあかすなり

雲端鴈

ほのかにも聞ゆるそらをながむれば姿は雲のころもかりがね

秋夕

しぐれゆく袖はことわりこゝろなき岩木も露のゆふぐれの秋

駒迎

雲居にてこよひ待ち見む逢坂の山路をいづるもちづきのこま

嶺月

旅人はさやかにも見しかつはるゝかひがね出づる秋の夜の月

關月

夜もなほこゝろゆるさで起き居つゝ月やみるめのせきの關守

杜月

晝と見てねぐらの鷺やおどろかむゆるぎの杜の月きよき夜は

磯月

うきねして誰かは涙のよるごとにくろき磯邊の月は見るべき

潟月

秋の夜は月のひかりのあかしがた涙の千里も見ゆるばかりに

朝霧

ながき夜のなほ殘るかとたどるまで秋霧くらきあさあけの空

擣衣

さゆる夜の霜にもかれず秋草の花ずりごろもうちしきるなり

山紅葉

秋はまたからくれなゐのふりいでゝ常磐の山も色づきにけり

瀧紅葉

岩根なるもみぢの色に染めかへてにしきを織れる瀧の絲すぢ

暮秋

行く秋のなごりを思ふそでの露消えずば後やかたみならまし

冬十五首

時雨過

しぐれつる雲のかへしの夕風にのこると見るも寒き日のかげ

落葉深

散りうせぬ秋の木かげもおしなべて嵐につもる山のもみぢ葉

殘菊

見し秋にうつろひかはるいろながらにほひはおなじ白菊の花

寒草霜

浮草の枯葉やのこるたきつ瀨のこほらぬうへも霜とぢて見ゆ

湊氷

冴えくらす湊の涙はこほれども猶音たかき比良のねおろしに

冬月

さえわたる雪げの空はなか〳〵にあらしにくもる冬の夜の月

枯葦

かれはてしあとはさながら夏川の玉江のあしの庭のいけみづ

浦千鳥

こと浦の□したふらし月のこる波のこなたに千鳥鳴くなり

池水鳥

はなち飼ふ友かと見れば池水にそら飛ぶ鴛のきつゝ馴れ行く

篠霰

降る霰音ばかりしてたまらぬはさゝわくる朝の袖もしをれず

夕鷹狩

いかにせむまた狩りゆかば歸るさの暮れはてぬべき鳥の落草

里雪

海士人やあしやの里の雪なかに我が住むかたの道たどるらむ

庭雪

積りえぬ程もわかれずしろたへの庭のまさごに降れるうす雪

炭竈

身の業をなげきこりつみさゆる日にあはれ翁の堪へで炭やく

惜歳暮

年ははや暮れていくたの池水にうかべるをしと思ふかひなき

戀二十首

初戀

後土御門天皇

思ひ入るその日よりはや逢坂のこゝろはかよふ戀路なりけり

忍戀

もゆるとも人はいかでかしら雪のしたにしのぶが原のわか草

不逢戀

戀ひ死なむ後までも猶うき人をおよばぬ枝に見てやなげかむ

祈戀

解けがたき人の心もひだちおびかけてぞたのむ神のしるべに

尋戀

我誘へその名とともにもれぬべし人のゆくへを人に問ふとて

聞戀

吹く風の音に聞きつる人ゆゑにこゝろの花の散るもはかなし

見戀

我が心亂れにけりなよそながらほのみちのくの忍ぶもぢずり

契戀

いつはりのある世と知らば契りおくわが言の葉も人は頼まじ

待戀

たのめおきて待たるゝ人もわすれば心にかくる夕なるらむ

逢戀

わすれじな假寢がてらもあふみのやかゞみの山の夜半の面影

後朝戀

今朝は猶名殘にこひしあはでだに幾夜むなしく過ぎ來つるころ

顯戀

忍びしをくるしと何か思ひけむあらはれぬれば猶つらき身に

偽戀

かねてより頼まぬ中のいつはりに今さらなにと人をかこたむ

變戀

つひにかくかはるつらさを歎けとや思はぬ中も契りおきけむ

稀戀

さくら花よそにうつろふ心より年にまれなる身のちぎりかな

久戀

黒髪はしろくなれどもこひそめし心のすぢのかはりやはする

被厭戀

かけて今かゞみの神のねがひてもこゝろ移さぬ中ぞかひなき

被忘戀

はかなくも忘らるゝ身にかへるかなさてもや人の思出づると

絶戀

いにしへのながらの橋はほくるとも絶えし契は又もかけじな

恨戀

數ならぬ身は蜑人のたぐひにもほさぬは袖師の恨みのみして

雜十首

寢覺鶏

にはとりのおどろかす音に寢覺して老の心をかねて知るかな

古寺鐘

昔をもとはゞこたへよ□とも名にたちばな寺のいりあひの鐘

名所松

いにしへもたぐひはあらじつくしなるみのゝを山の松の言の葉

山家

いつよりか絶えぬねがひも山水も心をすますいほりむすばむ

田家

冬もなほあけの細道ゆきかよひかど田のおもぞ人めかれせぬ

羇中衣

旅ごろもたちかさねても秋風の吹くと吹きぬる暮ぞ身にしむ

旅泊夢

音たかきうらわの涙のうきねにも身はならはしか夢結ぶなり

思往事

夢うつゝ誰に問はまし過ぎ來つる身のいにしへの定かならぬを

述懷

神ならでをさめむことやかたをかの森の嵐のさわがしき世を

祝言

鶴龜をわが世のほどの友としてありへむ數をちぎりおくかな

〔以上後土御門院御百首〕

立春

春きぬと今朝よりなべていふ人の心ややかてのどけかるらむ

山霞

出づる日のひかりをこめて山の端のくれなゐふかき朝霞かな

海霞

春風の□ふく音はのどかにてかすみの浪ぞおきに立ちそふ

子日

二葉より千代をかぞへて春ごとに野邊の小松や引きつくさまし

若菜

くるゝまで若菜つみつゝやすらはゞ朝の原の名をやたどらむ

朝鶯

出づる日はたかきにうつる吳竹の下枝を寒みうぐひすの鳴く

津梅

ことの葉のかぞいろと聞く難波津のこの花盛あだにやは見む

夜梅

うすくこく匂ふにしるしをちこちの梅が香さそふ夜半の春風

岸柳

河の瀬に岸のやなぎの枝たれてなみの花こそ咲くと見えけれ

春雨

まきのやも草のいほりもかはらめやふる音たてぬ春雨のそら

春月

佐保姫の春はかすみのそでふれて月のかつらの枝や折るらむ

春曙

花おそきたかねにしらむ横雲のわかれよしばし春のあけぼの

歸鴈

誰が中にかよはしなれて春はまたかへり待ちとるかりの玉章

栽花

庭の面にいかにうゑてか咲く花を根にはかへさぬ一木ならまし

翫花

いかにせむうちおきがたき花の香にかざゝばあかぬ色は見えめや

惜花

せめてさは木の下風よ長閑なれよそにちらさで花をだに見む

春駒

このごろはあれゆく駒も初草の若葉のうへにこゝろとむらむ

欵冬

山吹のあるが中にもまがきよりこぼれて咲ける枝やたをらむ

紫藤

枝ごとに松のみどりをこむらさきさも藤波のかゝりけるかな

暮春

こしかたに歸りもゆかば東路のそらをしるべに春やしたはむ

首夏

今日よりは春のわかれを卯月ぞといはでも人の春やしたはむ

更衣

今朝かゝる衣も花のしらがさね又はかとりの名にも立ちつゝ

卯花

富士のねにあらぬ垣穂の卯花もかのこまだらの雪とこそ見れ

郭公

よな〳〵にとぶらひきてぞ時鳥鳴く音をつくす三輪の山もと

砌橘

荒れのこる芝のみぎりの橘やちかきむかしの香をもそふらむ

早苗

さをとめがすげの小笠もけふの日も傾くまでにとる早苗かな

沼蒲

根やながき沼の岩垣かぎりなく深きあやめを引きぞわづらふ

梅雨

この比の雨の名におふ梅津川ゐぜきも見えずみかさ添ふなり

夕立

夕立のふりくるおとのあらち山やだ野をかけて風ぞはげしき

夏草

咲き殘す秋のちぐさも夏の野にひとつに見ばや花のいろ〳〵

夏月

明けやすき岩戸の關よとざししてしばしも見ばや夏の夜の月

瞿麥

見るまゝに花ぞおきふす常夏のあたりのちりや風はらふらむ

氷室

春かぜにけぬだにあるを氷室山夏の日かげもなほよそにして

納涼

世をすつる人もかくやと夕すゞみ樹の下石のうへのすまひは

夏祓

吉野川みそぎに流す麻の葉やちりしさくらの名にかよふらむ

早秋

今よりや吹きそふおとは高砂のをのへのまつの秋のはつかぜ

七夕

天の河そのみなかみやたなばたの逢ふ夜まつまの涙なるらむ

稲妻

月おそきそなたの空の雲間より見えてもくらきいなづまの影

籬荻

吹きこゆるまがきの荻のほなみより下葉ぞ風の音にたてぬる

野萩

秋萩の花をわけゆく我がこゝろひくまの野邊に今日や暮さむ

路薄

山人の歸るふもとの花すゝきこれもたきゞに刈りやそふらむ

曉露

夢のうちは秋のつらさもおぼえぬに寢覺あやしき袖の露かな

隣槿

あさがほのすゑこす風に中垣のこなたや後は咲きまさるべき

葛風

夕日さすみねの葛葉の秋かぜに雲さえかへるいろぞさびしき

夕鹿

暮れぬとて山より出づる程ならし唯こゝもとに鹿ぞ鳴くなる

初鴈

つもるべき越路の雪をおもひてや秋はみやこに鴈のきぬらむ

叢蟲

後土御門天皇

蟲の音にいかにうらむる淺茅生の賴みしかげも色かはりゆく

崎霧

秋ぐさの野島がさきの波も花も霧のまがきにいろぞこもれる

嶺月

しらなみの名にこそ立てれ松山やよな〳〵嶺を月もこえけり

湖月

さゞなみの音は絶えずも志賀の浦や月の氷のひまは見えねど

關月

月にこそこゝろとけぬれひめもすにもるはくるしき下紐の關

濱菊

よる涙もしらゝの濱はかはらねど菊のみひとり色ぞうつろふ

搗衣

おほかたに吹く秋かぜもしづは猶身にさむければ衣うつなり

黄葉

入日かげのこる木ずゑの初紅葉しぐれぬさきも色はそひけり

暮秋

したふ身もよそに過ぎゆく秋篠の外山の里の名にや立つらむ

初冬

嵐こそ吹く音きかね冬きぬとこゝのかさねもさむけかりけり

時雨

みやこをばよそに殘して一むらの雲ゐる山にふるしぐれかな

落葉

猶いかにみ山がくれにつもるらし谷の水にもうかぶ木の葉は

枯野

花を見し野邊のちぐさは枯れはてゝ陰のをざゝぞ霜に殘れる

寒蘆

みしま江や眞菰も波にをれふしていづれを蘆の枯葉ともなし

井氷

氷ゐる板井の清水いたづらに汲まではいかゞ今日もすぐさむ

千鳥

須磨の浦や四方の嵐のさゆる夜にさぞな千鳥の立つ空もなき

殘鴈

霜まよふかり田の面の庵ふりてもる人もなしと鴈ぞむれゐる

網代

氷魚はまだよるとも見えぬ網代木に凍りなはてそ宇治の川波

寒月

さえとほる月の光もひとつにてはらひもあへぬそでの霜かな

庭雪

今朝はまだあさきにつけて九重の名をこそうづめ庭のしら雪

炭竈

しなのなる淺間のたけのおもかげもけぶりにかよふ遠の炭竈

埋火

うづみ火の下にも今はつきぬらし寒さおぼゆる閨のあけがた

佛名

行く末の罪もぞ消えむ三世までの佛の御名をとなへおきなば

歳暮

浦波のたつことやすき月も日もつもれば春にちかのしほがま

初戀

さきの世にとはれし時か戀しくもおもひなりぬる夕ぐれの空

忍戀

うつゝには忍ぶとすれど戀ひわぶる心やゆきて夢に見ゆらむ

聞戀

知らせばやひとりふるやのさよ時雨音にきゝてもぬるゝ袂を

見戀

分け入りししげみの中のつらさをや月になぐさむ人の面かげ

尋戀

むらさきのゆかりも知らずはるゝと道ふみ迷ふ武藏野の原

祈戀

行く末を賴むにつけてつれもなき人をも身をも祈りけるかな

契戀

心にもまかせぬ世には行く末を契りおきぬる身さへたのまじ

待戀

とはれてもかひやなからむ我が心待つとせしまにつくしはてぬる

逢戀

別れてやつらきうつゝにかへらまし逢ふを夢路とたどる心は

別戀

暫しとていそぐ別はとゞめてもあけば人めをきていかにせむ

顯戀

なか〳〵に忍ぶけしきや見えつらむ思ひの外に立つ浮名かな

稀戀

今夜さへとはでや過ぎむ荒れ渡る宿の木立のしるし見えずば

絶戀

しばし猶待つしも苦しとはじとはいつの暮より思ひ絶えけむ

恨戀

恨みてもことわりしらぬ中なればつらき心をまたやしたはむ

舊戀

これもまたつもれば人の老とさへなるまで物を思ひけるかな

山家

住む人のありともいさや白雲のかさなる山のおくのかよひぢ

田里

小田ちかき伏見の里も假庵とあれゆく世々のあとをしぞ思ふ

閑居

人もこず我も立ち出でぬ心をやむぐらは知りて門をとづらむ

離別

山越えて行くらむ人の別路にとまるこゝろもくるしかるらむ

羇旅

白河のせき越えゆけばみやこ出でし比にちかづく東路のすゑ

海路

波風のさわがばさわげわだの原すぐなる舟のみちはかはるな

野宿

我が方のおもかげをこそ假寐する夢には見つれ眞野のかや原

故郷

荒れはつるのちまで訪へと故郷に花も紅葉もうゑやおきけむ

眺望

よさの海や漕ぎゆく舟のをちにても目にこそかゝれ天の橋立

述懷

とにかくにすてぬ心はあはれてふことをあまたに思ひ亂れて

懷舊

雲のうへにすみけむかひもさぞなありし昔の代々の月の光は

哀傷

さても誰がゆふべなるらむ鳥部山あはれさびしく立つ煙かな

蕭寺

はつせ山もろこしまでも憐みのひろきをわきて賴むとぞ聞く

瑞籬

へだてなく神やまもらむみづがきの久しく我も賴みきぬれば

祝言

いにしへに天地人もかはらねばみだれは果てじあしはらの國

〔以上後柏原院御百首〕

此八首は各題の一字をとりて初句の頭におきてよませ給へるなり、

あさがすみ

後土御門天皇

さして日の影はくもらぬあさがすみひかりやかはす玉津島山

すぎたてる三輪の山もとそことしも見えぬばかりの朝霞かな

むめのはな

むかしたが袖ふれぬれば梅の花人よりふかきかをりなるらむ

をみなへし

身にぞしむ露もさながら女郎花ふきみだりたる野邊の秋かぜ

はじもみぢ

しぐれてぞそれと知らるゝ櫨紅葉常磐の木々のまじる深山に

こひわびぬ

わりなしやつらき心の程をなど我のみかくはこひわびぬらむ

うちもねず

末よいかに夢さへたえていたづらにうちもねずのみ歎く契は

おもふこと

とにかくに思ふことなき時にあひて君が千年を仰がざらめや

〔以上文明四年五月二十八日玉津島法樂假名題目百首和歌〕

海邊七夕

こゝろなき海士も今夜は藻鹽草かきて手向けよほしあひの濱

折草花

月草のはなも咲く野の女郎花うつるこゝろに手折りわびぬる

晴夜月

ひとむらの雲ものこらぬ久方のそらのかぎりや月はすむらむ

歎無名戀

身に知らぬ歎にぬらす袂さへいとゞ立つ名のいひやなすらむ

不憑戀

定めなき世にはまことの言の葉も思へばあだの中にたのまじ

山家雨

うき世にて聞かばさびしき雨の音を思ひも入れぬ山かげの庵

砌下有松

住みすてし雲居の松の年を經て木だかき色はよそに見えけり

〔以上文明九年七月七日七首歌合〕

河上月

影見れば水のみどりもそめ河やそらゆく月のいろになりぬる

月下擣衣

衣うつおとにもしるし名にたかき月に千さとの外もねぬ夜は

貴賤憐月

我のみか月にはとものみやつこも心をくだくむらさきのには

〔以上文明九年八月十五日石清水法樂百首〕

初花

梅の花ちらずありとも咲きそむる櫻のかげをよそにやは見む

花下忘歸

あだに見し花の木かげのやどりさへ思へば春の日數へにけり

閑見月

山里にすまぬ身ながら月にこそ世のうきことも忘れはてけれ

磯雪

浦かぜのあらき磯邊に吹きよせて波よりたかくつもる雪かな

寄霜戀

うきなかの契は夢にあらねどもかれなば霜と身もきえねたゞ

寄鏡述懐

をさまりし昔をうつすかゞみとはみがきもなさぬ我が心かな

日吉

今はまたみやこの外ものどかにて照らす日吉の神のめぐみに

天上

たのしみの千代萬代にわたるなよつひにいつゝの衰ふる身を

寄鳥祝

かげたかき君がみぎりの松が枝に千とせをかけてすだつ雛鶴

〔以上文明九年十二月十日日吉社法樂百首〕

山中紅葉

色かはるふもとの眞柴わけ捨てゝ猶めにかくる峰のもみぢ葉

田家秋寒

もるいほに賤がかけほすいねがての夜寒の嵐かつふせぐなり

鶴伴仙齢

なれて見む後はわが身も仙人のすみかにちぎる千世の友づる

〔以上文明十四年九月二十八日詩歌合〕

雪中鶯

うぐひすの雪に木傳ふ羽風にや咲きあへぬ梅も花ぞ散るらむ

江畔柳

かづきする海士も入江の夕波にやなぎの髪のみだれあひつゝ

山家梯

谷かげのいほりの路は絶えにしを誰かよふらむ峰のかけはし

〔以上文明十五年正月十三日詩歌合〕

孔子

海原や筏のさをのすぐならぬ世にはいづくをさして行くべき

〔文明年中應製詩歌〕

伊勢

五十鈴川代々の流のみづからとゆくすゑ遠くなほいのるかな

釋迦

きさらぎや雲がくれにし月もなほ光を花にのこすとぞおもふ

地

古はあなを掘りても住みしをやはにふの小屋に今うつすらむ

秋

わきてなほ床も露けき時來ぬと老のねざめぞおどろかれぬる

日

あふげなほ岩戸をあけしその日より今にたえせずてらす惠は

甘

みどりごの乳房のみかはまつりごと甘きに民もはぐくまるらむ

鼻

匂ひきて小簾の隙もるたきものや色にも香にもあらぬゆかしさ

舌

世のうさも身の侘しさもいはじたゞ舌を結びし人もこそあれ

人

天地とわかれしなかのことわりを思へば人はかしこかりけり

舞

袖ふりし我が代も遠き少女子を年にかはらずいかで見るべき

三

雪の夜は月と花とのみよしのに春のいろをもわすれてや見む

〔以上明應四年十一月二十二日水無瀬宮法樂百首〕

初音

よる涙の音はかはらで住の江や松のみどりぞかすみそめける

花

あひにあひて花の盛は日もながく風ものどけき春のそらかな

月

秋はまた照りそふ月のならひをも見わかぬ老は春やわすれぬ

雪

白妙のたかねはそれかみやこまで雪吹きおくれ比良の山かぜ

不遇戀

さきの世の契知らばやかくばかりつれなかるべき報ありやと

〔以上明應四年十二月十二日長州一宮住吉社御法樂和歌〕

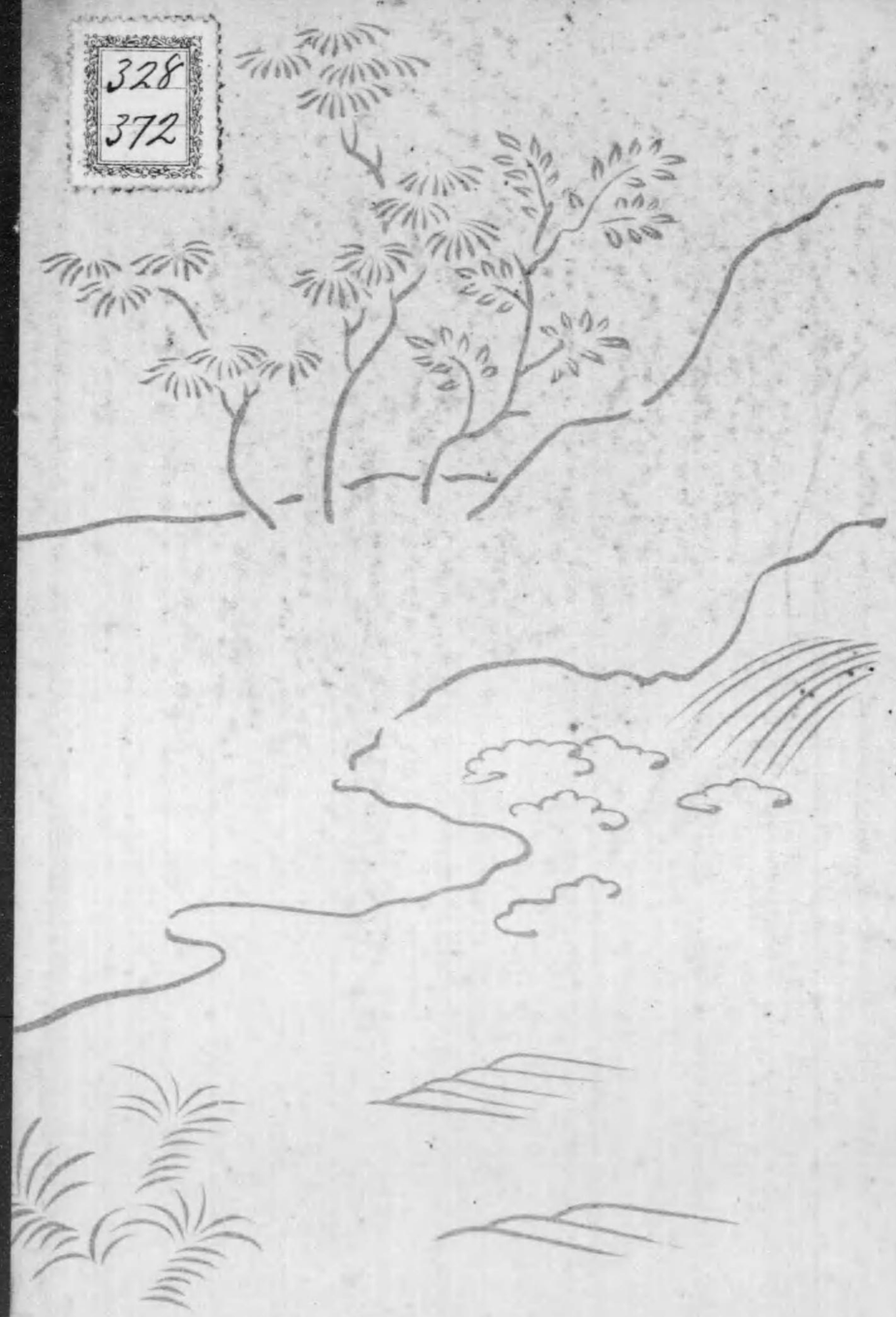
般舟院に納めさせ給へる御影のうへに

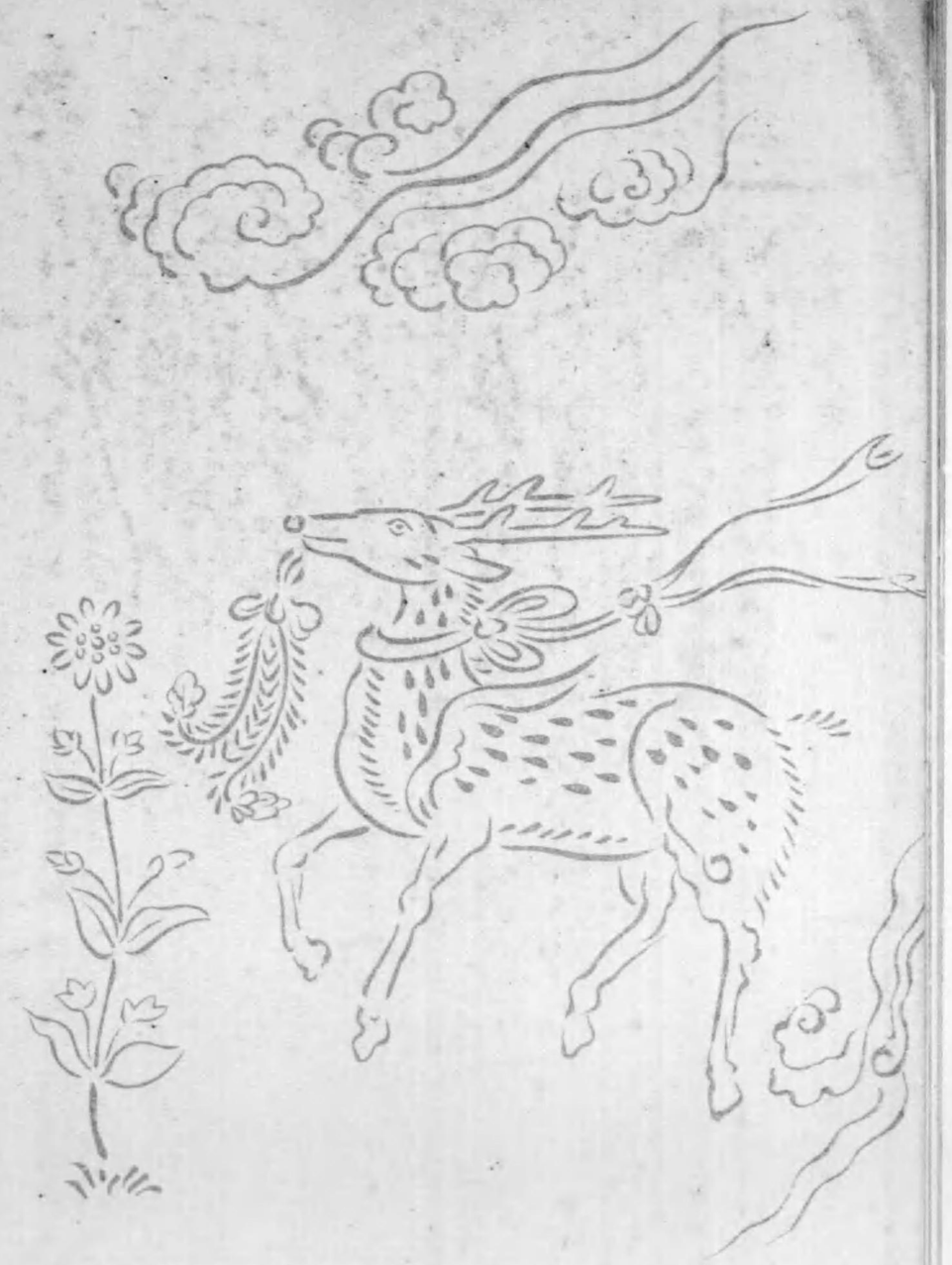
わがよはひ彌陀の誓のその數にあへるを時とうつすおもかげ

〔池の藻屑〕

歴代御製集卷十二終

328
372





終